

## 『指輪と本』における試金石としてのモリニズム

吉 門 牧 雄

(人文学部英文研究室)

### Molinism as a Touchstone in *The Ring and the Book*

Makio YOSHIKADO

(Department of English)

ロバート・ブラウニングの『指輪と本』(*The Ring and the Book*)は1698年1月2日にローマで起きた殺人事件の裁判記録を綴じ合わせた『古い黄色の本』(*The Old Yellow Book*)を題材とし、それにブラウニング自身の詩的想像力を加味して一篇の文学作品としたものである。<sup>1</sup>この詩は十名の独白者がそれぞれの視点から事件を語るという、所謂劇的独白の手法を用いて書かれたものであるが、その中にモリニズム (Molinism) に関して注目すべき点が見受けられる。それは第4巻 (Tertium Quid) の話者を除く全ての独白者がモリニズムに言及していることである。しかも、その言及の回数がウィリアム・コイルも指摘するように、直接・間接的に35回に上る。<sup>2</sup>それだけ重要な引用であるにもかかわらず、この詩の題材である『古い黄色の本』の中ではただ一度だけ、しかもあまり重要とは思えない匿名の著者のパンフレットの中に出てくるにすぎない。その所で著者は不貞の妻ポンピリアに裏切られた夫ギドゥを支持しない者は、「神の掟に罰を受けることなく背く力を、検邪聖省の権威によって抑制されたモリノスの教義や哲学的罪とともに」ローマに導入しようとしているかも知れないと仄めかしている。<sup>3</sup>

このような点を考慮に入れると、ブラウニングは何故『指輪と本』の中で35回もモリニズムに言及したのか、またモリニズムはこの作品の中でいったいどのような役割りを果しているのか、という疑問が湧いてくる。また、モリニズムへの言及のほとんどが敵意に満ちたものであるのに対して、何故カポンサッキと教皇インノセント12世だけがモリニズムについて好意的発言をしているのかという点も重要である。そこで、本稿ではモリニズムへの言及を具体的に分析しつつ、これらの疑問点をできる限り明らかにしていきたいと思う。

実際の考察を始める前に、ブラウニングのモリニズムとはいったい何を意味しているのかを確認する必要がある。普通、カトリック教会内でモリニズムと言えば、ルイス・デ・モリナ (Luis de Molina, 1535-1600) によって創立され、教会によって承認された神学体系であるのに対し、この詩の中で使われるモリニズムはミグエル・デ・モリノス (Miguel de Molinos, 1628-1696) によって唱道された教義で、カトリック教会内では静寂主義 (Quietism) と呼ばれ異端と目されているものである。<sup>4</sup>

このモリノスは1628年にスペインの上流階級の家庭に生まれ、コインブラ大学で神学の学位を得た後、ローマに赴き、そこで急速に霊的指導者として驚くべき名声を博した。<sup>5</sup>1675年に彼は『霊的指標』(*Guida Spirituale*) という著作を出版したが、この本は大きな反響を呼び彼の教義に賛同する者の数が飛躍的に増加した。この一派は初めは教会内で歓迎され、教皇インノセント11世は彼をバチカンに住まわせるほどであった。しかし、後にイエズス会士 (the Jesuits) とルイ14世の反感を買い、ついに1685年モリノスは異端者として捕えられる。二年後には、イエズス会士の圧力に屈

した教皇が彼を異端であると断定し、モリノスは人々の前で彼の説く教義の全てが誤りであったと認めさせられ、終身刑に処せられてしまった。しかし、1696年12月獄死するに至るまで、彼は自分の教義の正当性に対する信念を捨てなかった。1696年12月と言えば、『指輪と本』の殺人事件が起きた日の一年ほど前のことであり、リチャード・D・アルティックも主張するように、この事件のあったころはまだモリノスが引き起した論争の反響は鳴り響いていたと考えられる。<sup>6</sup> それゆえ、モリニズムはまさにこの詩の中で「目下の話題」(“the subject of the day,” Book VI, l. 360) であると言えるだろう。

さて、モリニズムの内容を知るためには、モリノスの『靈的指標』そのものを読む必要がある。この本の中で、モリノスは「謙遜と真実と明晰さをもってありのままの真理」を教えることを目標とし、キリストとの直接的で内的な交わりを強調した。<sup>7</sup> このため人間と神との仲保者としてマリヤや聖人を崇拜することを拒否した。また、彼は静寂の中で神は人間の祈りに直に応えてくるのであって、儀式や告解といった外面的な事柄は靈的生活には不必要であると主張している。モリノスによれば、魂の完成は自我を神の意志のもとにすっかり捨て去って、純一な心で瞑想の生活をすることによって得られるものであり、「内なる瞑想こそ信仰であり、静寂こそ神の臨在」である。<sup>8</sup> このような信仰の結果、モリニズム信奉者たちは教会の儀式やこの世的な活動を見捨てるに至り、イエズス会士はモリニズムを教会制度全体への挑戦であるとして攻撃し始めたようである。

次に、『指輪と本』の本文に実際現われるモリニズムへの言及について具体的に述べていこう。まずブラウニング自身が自分の言葉で語っている「規範的な言述」<sup>9</sup> である第1巻 (The Ring and the Book) において、彼は教皇インノセント12世がモリニストたちに寛大であったことに関してこう述べている。

Those Jansenists, re-nicknamed Molinists,  
 ('Gainst whom the cry went, like a frowsy tune,  
 Tickling men's ears - the sect for a quarter of an hour  
 I' the teeth of the world which, clown-like, loves to chew  
 Be it but a straw twixt work and whistling-while,  
 Taste some vituperation, bite away,  
 Whether at marjoram-sprig or garlic-clove,  
 Aught it may sport with, spoil, and then spit forth)  
 'Leave them alone,' bade he, 'those Molinists!

(Book I, ll. 307-15)

ここに、「今モリニストと再び渾名をつけられたあれらのヤンセニスト」(l. 307) とあるが、両者はそれぞれ異なる教派の信徒を示すので、コイルも言うように、ここでブラウニングが「モリノスの教えとヤンセニズムとを混同しているのは明らかである。」<sup>10</sup> ヤンセニズムというのはコルネリウス・ヤンセン (Cornelius Jansen, 1585-1638) の教えに基づく教義で、人間の意志を邪悪な欲望であると見なしており、自己の意志を放棄し全てを神に委ねるという点で、また異端として迫害されたという点でモリニズムと似かよっている。<sup>11</sup> このような二つの異端派が十七世紀に相前後して登場しているのだから、前述のような混同が起きたと推測されるが、その理由はともかく、こうした混同はブラウニングがモリニズムの教義の内容やその歴史的背景などについては詳しい知識を持ち合わせていなかったことを暗示している。

事実、ここで彼はモリニズムの内容については一切触れず、世間一般の偏見に満ちた意見を代表

して述べているに過ぎない。スティーヴン・フィンレイも指摘しているように、第1巻においてブラウニングは全能の語り手ではなく、彼自身一人の登場人物として独白している。<sup>12</sup>そして、全能の語り手はこの詩全体の背後にいたのであるから、モリニズムに対する詩人ブラウニングの見解は『指輪と本』全体の読みから導き出す以外にはないと思われる。

第1巻においてこのような形で言及されたモリニズムは、他の箇所においてもそれがいったい何であるかということは問題にされず、いろいろな形で用いられている。まず、第2巻(Half-Rome)の場合を見てみよう。この巻の話者は殺人事件のあった翌日、サン・ローレンツ教会の中に安置されているピエトロとヴィオランテの死体を見物しに来ているのだが、そこで70歳の老人ルカ・キニと出会う。

I jostled Luca Cini on his staff,  
Mute in the midst, the whole man one amaze,  
Staring amain and crossing brow and breast.  
'How now?' asked I. 'Tis seventy years,' quoth he,  
'Since I first saw, holding my father's hand,  
Bodies set forth: a many have I seen,  
Yet all was poor to this I live and see.  
Here the world's wickedness seals up the sum:  
What with Molinos' doctrine and this deed,  
Antichrist's surely come and doomsday near.  
May I depart in peace, I have seen my see.'

(Book II, ll. 118-28)

ここでルカ・キニは今まで70年間いろいろな死体を見て来たが、こんなに酷いものは無かったと語り、「世の邪悪さはここに締め括られている。モリノスの教義やこの行為やらで反キリスト者は確かに来ており、運命の日は近い。」(ll. 125-27)と付け加えている。

その後、ある枢機卿がその場に入ると、すかさず助任司祭のカーロウが登場して、ギドゥの殺人事件についてはわずか十数語をもって片付けてしまう。

He did the murder in a dozen words;  
Then said that all such outrages crop forth  
I' the course of nature, when Molinos' tares  
Are sown for wheat, flourish and choke the Church:  
So slid on to the abominable sect  
And the philosophic sin - we've heard all that,  
And the Cardinal too, (who book-made on the same)  
But, for the murder, left it where he found.

(Book II, ll. 173-80)

枢機卿に向かって、カーロウは「そのような非道な行為の全てはモリノスの毒麦が小麦のかわりに種播かれ、繁殖し教会を苦しめるとき自然の経緯として出てくるものだ。」(ll. 174-76)と言って、いつの間にかモリニズムとその「哲学的罪」(l. 178)の方へ話題を替えてしまう。それは相手の枢機

卿がモリニズムについて本まで書いた人物だからであり、モリニズムを出しにして彼に取り入ろうとしているカーロウの抜け目なさが浮き彫りにされている。

また、独身者でありポンピリアに対して深い同情の念を感じている第3巻 (The Other Half-Rome) の語り手は、死の床にあるポンピリアの傍に居合わせた男の言葉を引用している。

‘Such crimes are very rife,  
Explode nor make us wonder now-a-days,  
Seeing that Antichrist disseminates  
That doctrine of the Philosophic Sin:  
Molinos’ sect will soon make earth too hot!’

(Book III, II, 93-97)

ここで、この男は事件の秘密の原因を説明して、「反キリスト者が哲学的罪の教義を播き散らすのを見れば、そのような犯罪が流行して、爆発するのも今日何ら驚きではない。モリノスの一派はすぐにも地球を焦熱地獄と化するだろう。」(II. 93-97) と洩らしている。

以上の三つの例からも伺えるように、モリニズムは何の謂れかこの残酷な殺人事件と結び付けられ、時代悪の権化であるかのように描かれている。殺人という物理的に犯された罪とモリニズムのいわゆる「哲学的罪」、すなわち内面の精神的・宗教的罪とが同じレベルで語られているのである。そこではモリニズムがいったいどのような教義なのかといったことは全く問題ではなく、異端というレッテルをはられた「モリニズム」そのものが大事なのである。彼らにとって、モリニズムは結局世の悪を罵る際の一種の‘smear word’となっているに過ぎない。<sup>13</sup>

しかし、この「モリニズム」はいつも狭い意味の‘smear word’として使われている訳ではなく、その他にも色々な文脈でさまざまな目的のために用いられている。例えば、前述した第3巻の話者はポンピリアがギドゥや彼の手下によって深い傷を負わされながらも事件後数日間生き続けているのは奇跡だとして、聞き手に向かって、「それは奇跡だ！ そうあなたのモリニストたちに語ってくれ！」(“A miracle, so tell your Molinists!” I. 34) と言ったりする。また、聖者のようなポンピリアが何故あんなに残酷な行為の犠牲にならなければならないのかと訝りつつ、「何故彼女が一あなたでもなく私でもなく、ましてやモリノス自身でもなく一ギドゥ・フランチェスキニの心が何を抱き得るかを学ばせられたのか。」(“Why was she made to learn / -Not you, not I, not even Molinos’ self- / What Guido Franceschini’s heart could hold?” II. 108-10) と嘆いている。いずれもモリノスやモリニストたちという異端者、反キリスト者を引き合いに出して、ポンピリアの殉教者としての神聖さを強調しており、モリニズムはそのための引き立て役として用いられている。

さて、冒頭でも述べたように第4巻の話者はモリニズムに一度も言及していない訳であるが、これが偶然のものか意識的なものなのかははっきりしない。しかし、A.K. クックも述べているように、この人物が貴族階級に属する者なので一般大衆の話題になっているようなモリニズムなどに係わりたくないと思ったのかも知れない。<sup>14</sup> そうだとすれば、モリニズムに言及しなかったこと自体彼の高踏的貴族主義を表わしていると言えよう。

次に第5巻 (Count Guido Franceschini) の中で、法廷の場に立たされ弁明を試みているギドゥがどのようにモリニズムに言及しているかを見てみると、彼が常にモリニズムを利用して自分の弁明が裁判官たちに対して良き印象を与え、説得力を持つようにしていることが解る。ギドゥは自分の青年時代を振り返り自分は長男であるので戦争に行けなかったが、その代わりにモリニズムを攻撃することで聖職者として立身出世をしようとしたと語る。このような言葉はかえって彼の利己的で抜

け目のない性格をあらわにしている。さらにギドゥはポンピリアがカボンサッキとローマに逃げた際、彼らに毒を盛られていかに酷い目に会ったのかを強調している。

Well, this way I was shaken wide awake,  
Doctored and drenched, somewhat unpoisoned so;  
Then, set on horseback and bid seek the lost,  
I started alone, head of me, heart of me  
Fire, and each limb as languid ... ah, sweet lords,  
Bethink you! - poison-torture, try persuade  
The next refractory Molinist with that! ...

(Book V, ll. 1037-43)

ここでギドゥはモリニズムを自己弁護のために援用しているというよりは、腹立ち紛れに、「毒の苦悶、今度は頑固なモリニストを説伏せるのに試してみろ。」(ll.1042-43)と言っているだけで、あまり説得力は無いようである。

また、第7巻 (Pompilia) においては、話し手であるポンピリア自身はモリニズムに言及していない。だが、彼女が夫ギドゥに身を任せるのを拒否して、大司教に助けを求め修道院に入れてほしいと懇願すると、大司教は「これらのモリニストたちのとよく似た冒瀆だ。私はお前が彼らの書物を拾い読みしたのではないかと疑わざるを得ない。」(“-A blasphemy so like these Molinists’, / I must suspect you dip into their books.’” (ll. 769-70) ) と言って、彼女の願いを拒絶するばかりでなく、彼女の行為をモリニストのものと準え彼女を異端視しているのである。

このような大司教の応答に対してポンピリアは全く絶望してしまうが、その絶望は彼女の宗教観にも大きな変化を来すものであった。今まで神の代理者であると思っていた大司教が唯の人間であり、社会や教会の規範を乱すような者はすぐにも異端者呼ばわりする者であると痛感すると、彼女はもはや制度的な教会に頼ることなく、神の直接の導きを求め始める。そしてついにカボンサッキが神の’soldier-saint’として彼女を救うべく遣わされる訳である。このような彼女の信仰はそれが神の直直の指図と導きに信頼するという点においてモリニズムと類似するものとなって来る。勿論、年若く読み書きもできないというポンピリアはモリニズムについて詳しく知り得る立場にはないのだが、彼女の存在そのものが無意識のうちにモリニズム的なものになっていたと言えるだろう。

このことを意識的に宗教的観点より捕えていたのはカボンサッキである。ローマ・キングがその著 *The Focusing Artifice* の中で述べているように、カボンサッキは「教会をトマス・アキナスの神学と、そして、ポンピリアを大まかな意味でモリニズム」と同一視しているようである。<sup>15</sup> 実際、カボンサッキもポンピリアに会う前は他の司祭たちと同様に教会の職務日課をそつ無くこなしつつ、詩を作ったり、ある貴夫人に取入ったりしながら、とんとん拍子で昇進を続けていた。<sup>16</sup> しかし、劇場におけるポンピリアとの邂逅以来彼の宗教生活に変化が現われて来る。

まず第一に、貴夫人におべっかを使ったり恋の詩を書いたりすることがばからしくなり、ちょうど四旬節 (Lent) も近いのでピエヴェ教会の聖職者席につめていようと決心する。そのような姿を見たカボンサッキのパトロンは急に改まった様子でこう語る。

‘Young man, can it be true  
That after all your promise of sound fruit,  
You have kept away from Countess young or old

And gone play truant in church all day long?  
Are you turning Molinist?

(Book VI, ll. 469-73)

ここでパトロンの言わんとするところは、将来を嘱望されている身にもかかわらず、伯爵夫人からも手を引いて一日中教会の中で油を売っているなんてどうしたことか。お前は異端のモリニストにでもなろうとしているのか、ということである。それに対してカポンサッキは、「私がクリスチャンになったらどうなるでしょうか。」(“Sir, what if I turned Christian?” l. 474) と即座に答えている。彼は既に教会の中ではだれからもクリスチャンと認められているのであるから、この答えは少し突飛な感じがあるが、彼がここで問題にしているのは、教会が定めた職責をただ外面的にこなしている者が真のクリスチャンなのかどうかということである。彼がクリスチャンになるという時、それはキリストの真の僕になるという意味であり、キリスト教の本質に係るものである。恐らくここで、カポンサッキは「モリニスト」という語の中に、制度的教会が失ってしまったある本質的なものを見出ししていたのだと思われる。

その後もカポンサッキは自分の宗教生活がどうあるべきかを考え、トマス・アキナスの『神学大全』を読み耽るが、ポンピリアの微笑が目に焼きついて離れない。そして、ポンピリアからギドゥの許を逃れる手助けをしてほしいとの依頼があった際、再び『神学大全』を開き熟慮するが、教会の宗規を破っても神の命令に従いポンピリアを救い出すことが司祭としての真の務めであると決意する。<sup>17</sup> カポンサッキは開かれた『神学大全』を前にして、「彼の本を閉じよ。他の見物がある。」(“Shut his book, / There's other showing!” ll. 1098-99) と心に決して、彼の使命の遂行に着手する。それゆえ、彼にとってポンピリア救出は一種の宗教的自己実現であったと言えるだろう。

最後に、このカポンサッキとともにモリニズムに対して好意的な発言をしている教皇の場合を考えてみたいと思う。教皇は本来異端であるモリニストを率先して非難しなければならない立場にあるのだが、現実には正反対の態度を取っている。ギドゥに対する最終判決の任を人生最後の神に対する責務であると自覚し、今、歴代の教皇の歴史を読みつつある。そして、そこに大きな矛盾を発見する。例えば、教皇ステファヌス7世は前任の教皇フォルモサスの遺骸を教会会議の中に運び入れ、それに教皇の衣を着せてペテロの座にまるで生きていたかのように座らせた。そして、彼はフォルモサスの教皇としての称号を剥奪し、生前彼が出した勅令を全て廃止した。その上、見せしめとして彼の死体は市場に引きずり出され切り刻まれてしまった。

しかし、ステファヌスが死ぬと彼の後継者ローマヌスは、フォルモサスは正しかったと抗議し、次に、セオドール2世が教会会議を召集してフォルモサスの地位を回復し、最後に、ヨハネ9世がステファヌスを破門した。ところが今度はセルギウス3世がステファヌスの権利を再確認し、フォルモサスを破門してしまう。ここでこの問題は下火となり、セルギウス3世の判決が教会の最終判決となってしまった。ただその後も度々、教会の中ではフォルモサスは聖人であったという意見が優勢をしめることがある。

このような事例を読んだ後、教皇は「どの判決が不謬なのか。前任者のうち誰が神の代わりに語ったのか。」(“Which of the judgments was infallible? / Which of my predecessors spoke for God?” ll. 150-51) と自問している。そして、人間のすることに絶対的に正しいといったものはなく、「人生の仕事はただ恐ろしい選択である」(“Life's business being just the terrible choice.” l. 1237) ことを実感する。先人たちがそれぞれの立場から彼ら自身の判決を下したように、今度は彼自身が決断する時だと悟り、神の前に恥じない選択をしようと努める。

このような考えを持つ教皇は神の真の意志に副った判決を行なうためには、除かれた疑問を再び

取り入れ、既に認められた真理を否定する必要があると感じ、こう独語している。

As we broke up that old faith of the world,  
 Have we, next age, to break up this the new -  
 Faith, in the thing, grown faith in the report -  
 Whence need to bravely disbelieve report  
 Through increased faith in thing reports belie?  
 Must we deny, - do they these Molinists,  
 At peril of their body and their soul, -  
 Recognized truths, obedient to some truth  
 Unrecognized yet, but perceptible? -  
 Correct the portrait by the living face,  
 Man's God, by God's God in the mind of man?

(Book X, ll. 1863-73)

ここで教皇はモリニストたちが生命を賭けて彼らの教義を実践するからには、そこに何か今まで認められなかった真理が含まれているかも知れないと仄めかしている。つまり、教皇はモリニズムを人間が概念的に作り上げて固定化した神ではなく、人間の心に直接訴えてくる生ける神を拜する新しい型の信仰の先触れであると考え、モリニズムに対して深い同情を示している。

以上のように分析して来ると、教会により異端とされたモリニズムを積極的に非難する立場にあるカボンサッキと教皇とが、何故モリニズムに対して好意的言及をなし得たかが明らかとなってくる。一言で言えば、その理由は二人の精神的態度にある。つまり、二人はある既成の概念に対して疑いを抱きうる精神的自由さを有していた。ある一派、この場合モリニストたちが異端であるとされるのは、彼らが教会内の多数派の安定を乱す恐れのある少数派だったからであり、そのモリニズムに好意的・同情的であり得たことは、彼らが教会で認められた一定の価値規準に囚われない心を持っていたことを意味している。

そして実際、カボンサッキは教会の定めに従うよりも、内なる神の声に従うことの方がクリスチャンたる者の真の務めだと信じて、教会の枠を飛び越えて行った。一方、教皇は俗人ではあるが同時に下位の聖職に就いているギドゥを死刑に処したならば、ルター派やカルビン派、あるいはモリニストたちのような異端者らを活気づけるのではないかと懸念しつつも、ギドゥに有罪の判決を下す。それは教皇が神と真理の前にリベラルな心的態度を取り得たからであり、その故にモリニズムに対しても寛大であり得たのだと思われる。ただし、彼自身は依然として教会制度の枠内に留まっており、その点で教会の規定を打ち破ってでも宗教的自己実現を遂げたカボンサッキとは異っていると言える。

このように考察を進めて来ると、『指輪と本』の中においてモリニズムがかなり大きな役割りを担っているのが解る。モリニズムに言及する多くの独白者の場合、モリニズムの宗教的内容などは全く問題でなく、それがギドゥによる殺人事件のあった当時まだ人々の口の上る異端派の名であることが重要なのである。実際、モリニズムはそれぞれの話者によって恣意的に意味づけられ、様々な目的のために言及されている。その結果、この語はそれを用いる独白者の判断上の片寄り、偏見、先入観といったものを写し出す鏡として機能している。ただし、カボンサッキと教皇においては、モリニズムが本来の宗教的文脈の中で捕えられ、それがキリスト教の本質的な問題を含むものであると考えられたゆえ、他とは異なる使われ方をしている。

最後に結論として言えることは、このモリニズムが各話者の心理的・宗教的特徴を知る上で重要な「試金石」としての役割りを演じているということである。

### 注

- ※ 本論は1988年5月22日、日本英文学会第60回大会において口頭発表した原稿に加筆したものである。
- 1 本論ではブラウニングの詩のテキストとして、Richard D. Altick ed., *Robert Browning: The Ring and the Book* (New Haven and London: Yale UP, 1971) を使用した。
  - 2 William Coyle, "Molinos: 'The Subject of the Day' in *The Ring and the Book*," *PMLA*, 67 (1952): 308.
  - 3 Charles W. Hodell trans. and ed., *The Old Yellow Book: Source of Robert Browning's The Ring & The Book* (London and Toronto: J. M. Dent & Sons, Ltd.; New York: E. P. Dutton & Co., 1911) 150.
  - 4 *New Catholic Encyclopedia* (New York: McGraw-Hill Book Company, 1967) Vol. IX, 1010-14, Vol. XII, 26-28. 以下 *NCE* と略す。
  - 5 モリノスの生涯については、*NCE*, Vol. IX, 1013-14, および、John Bigelow, *Molinos the Quietist* (New York: Charles Scribner's Sons, 1882) 参照。なおモリノスの生年や没年に関しては異説もあるが、ここでは *NCE* の記載に従った。
  - 6 Altick 634. なお Mary Rose Sullivan, *Browning's Voices in The Ring and the Book: A Study of Method and Meaning* (Toronto: U of Toronto P, 1969) xii 参照。
  - 7 Michael de Molinos, *The Spiritual Guide*, ed. Kathleen Lyttleton (London: Methuen & Co. Ltd., 1885) 51.
  - 8 Molinos 93.
  - 9 Harold Bloom and Adrienne Munich ed., *Robert Browning: A Collection of Critical Essays* (New Jersey: Prentice-Hall Inc., 1979) 25.
  - 10 Coyle 308.
  - 11 *NCE*, Vol. VII, 818-24.
  - 12 C. Stephen Finley, "Robert Browning's 'The Other Half-Rome': A 'Fancy-Fit' or Not?," *Browning Institute Studies*, 11 (1983): 129.
  - 13 Richard D. Altick and James F. Loucks II, *Browning's Roman Murder Story: A Reading of "The Ring and the Book"* (Chicago and London: U of Chicago P, 1968) 322. なお Robert Langbaum, *The Poetry of Experience: The Dramatic Monologue in Modern Literary Tradition* (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1963) 129 参照。ここで、ラングバウムはモリニズムが "a scapegoat on which to hang the evils of the time" として利用されていると主張している。
  - 14 A. K. Cook, *A Commentary Upon Browning's "The Ring and the Book"* (London: Oxford UP, 1920) 306.
  - 15 Rome A. King Jr., *The Focusing Artifice: The Poetry of Robert Browning* (Athens: Ohio UP, 1968) 150.
  - 16 ポンピリアに会う以前のカポンサッキの状態を、キングは "spiritually dead, a clerical manikin" (King 147) と表現している。
  - 17 William Irvine and Park Honan, *The Book, the Ring, and the Poet: A Biography of Robert Browning* (London, Sydney, and Toronto: The Bodley Head, 1974) 428 参照。